

位置と環境

弥次ヶ湯古墳は、指宿市十町小字数領一帯に広がる敷領遺跡地内から発見された。遺跡は山裾から海岸に向けて緩傾斜する海拔4～6mの火山性扇状地の末端部にある。

調査の経緯

敷領遺跡では、平成8年に公営団地建設に伴い、市教育委員会により発掘調査が行なわれ、平安時代の水田、奈良～平安時代の建物遺構等が発見されていた。この団地の北隣にもう1棟団地建設が計画され、平成10年に発掘調査を行なった。

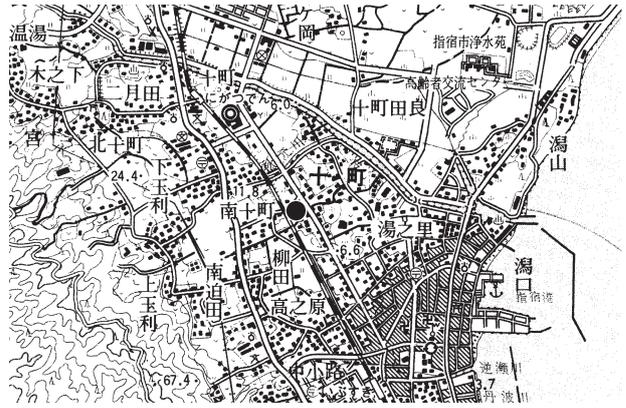
当初は、平成8年の調査の結果から、同様の遺構の広がりがあるものと予想されており、古墳の存在については、全くの予想外であった。

古墳は、現在の地面から、わずか30cm前後の所に埋もれており、その大部分は、火山灰に埋没していた。調査区の西壁に接するかたちで墳丘の約1/2を確認することができた。残りは、生活道路となっている団地内の市道の下に隠れていたため、発掘できなかった。そこで、地下レーダー探査で地形を把握し、円墳であることを確認した。

調査地点は、湧水がひどく、周溝の調査は、湧き出る水をポンプアップしながら行なわれた。周溝からは、土器の他にヤブツバキやニワトコ、ノブドウの種子、さらには、打ち込まれた杭の一部が出土した。なお、この杭の放射性炭素年代測定の結果、補正年代で1440±40yBPの値を得ており、土器の年代観とも調和的であることが確認された。

遺構と遺物

古墳は、その大部分が7世紀第四4半期の開聞岳火山灰「青コラ」の2次堆積層に覆われており、青コラに被覆されなかった墳丘の上部の一部は既に削平を受けていた。墳丘の直径は、約17.5mである。残存する墳丘の高さは最大で約1.3m、周溝は、幅2m前後、深さ約40～60cmで、埋土からは、甕、鉢、壺、高坏、埴、ミニチュア土器など800点の土器片が出土した。埋葬施設については検出し得なかった



第1図 弥次ヶ湯古墳の位置



写真1 弥次ヶ湯古墳の遠景（検出途中の様子）

が、既に削平を受けた部分にあった可能性も考えられる。

弥次ヶ湯古墳の築造時期は、出土遺物の年代観より、5世紀後半から6世紀前半と推定される。

古墳の「空白地帯」と呼ばれていた薩摩半島からの円墳の発見は、古墳分布の限界線を書き換えると同時に、古墳時代の薩摩半島の社会像に再考を迫る契機となった。

特徴

薩摩半島南部は、これまで古墳が発見されていなかったことや成川遺跡、枕崎市松ノ尾遺跡の調査成果から、長い間土墳墓分布圏として認識され、それが「隼人」の社会像と結びつけられていた。

弥次ヶ湯古墳の発見は、当時の薩摩半島の社会像を改めて見直す必要性を投げかけたと言える。

ところで、平成8年度の敷領遺跡の調査地点にも小円墳の存在が指摘されている。このエリアに古墳群がある可能性を示唆するもので、そうした意味に

においても今後の調査が重要となろう。なお、今回、埋葬施設については明らかにできなかったが、地下レーダー探査のデータや小円墳の周溝と判断しうる部分に竪穴と考えられる穴があったことを考えると地下式横穴墓の可能性も棄却できない。今後の調査に期待したい。

また、火山灰に埋没した古墳として、災害考古学の側面から積極的なアプローチを行なうことも必要である。古墳の埋没過程の状況や埋没後の状況の精査から、災害の復元のほか、古墳の管理問題、当時の古墳に対する評価やその変化を読み解く手がかりを得ることができると考えられる。

資料の所在

出土遺物は、指宿市考古博物館時遊館 CoCco はしむれに展示・保管されている。

参考文献

指宿市教育委員会1999「弥次ヶ湯古墳・敷領遺跡II」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』31

(渡部徹也)



写真2 弥次ヶ湯古墳全景



写真3 周溝の遺物出土状況（ほとんどが破片資料であった。）



写真4 墳丘の裾部分の断面（俵状に土を盛って墳丘を築造している。）



写真5 墳丘中央部分の断面（薄く土を何度も張って版築状に仕上げている。）